

紹介

W. Den Boer, *Progress in the Greece of Thucydides*

人類社会が物質的にも精神的にも進歩しつつあるという見方、要するに「進歩の思想」は、ルネサンス以後、特に啓蒙期以来の西欧でのみ成立した思想だとされている。このような思想は東洋では成立しなかったから、その点が東西を分かち一つの特徴だとも考えられる。西洋における、この思想の成立の歴史については、J. B. Bury の名著の「The Idea of Progress (一九三二年)」があつて、古代から十九世紀中頃までのことが扱われている。Bury はケンブリッジ大学の近代史の教授であつたが、周知のように、同時に古代ギリシア史や東ローマ帝国史の標準的概説書、さらに「古代ギリシアの歴史家たち」などの著者でもあつた。従つて西洋古代のことにも精通しており、上記の書物はその広範な知識に基いている。彼は古代の著作のうち進歩の思想

を示しているとも見られる重要な個所を取上げ、それ自体を問題にするだけではなく、その後関係や背景をも簡潔に述べ、結局、古代には、(中世も同様だが)、進歩の思想というものが、ほとんど認められないと結論した。恐らく、大勢はこの意見に賛成であろうが、最近では反論も出されている。

古代における進歩の思想を正面から再検討する仕事は、L. Edelstein によつて企てられたが、未完のまま残され、全体で八章の計画が、前半の四章だけ(ヘレニズム時代まで)が死後ただちに公刊されている(The Idea of Progress in Classical Antiquity, 1967)。もちろん、その他にも、この問題に関連して意見を述べている学者は多い。かくして、むしろ単純とも見える、この問題について学者間に正反對の説が対立したままになっている。ここに紹介する Den Boer は、かかる情況に苛立ちを感じて、自説を述べ裁断を下そうとするのである。

Den Boer によれば、Edelstein の「進歩の思想」の考え方は、生物学的な思想に基いているらしく、自然および人間には時間とともに発展する傾向が内在している、という見方を前提としているという。しか

し通常の意味での「進歩の思想」はこれとは少し異なるとして、Den Boer 自身は、自然としての人間を度外視し、社会の進歩についての考え方と定義する。そして本書で考察の対象をソクニディデスの時代に限定しているのは、直接には E. R. Dodds が論文集 The Ancient Concept of Progress and Other Essays (一九七三年) 所収の主論文で、「前五世紀の限られた期間にのみ進歩の思想が知識人一般に広く承認されていた」と主張しているのに対して、正面から反論するためであるらしい。著者はまず次のような一般的な指摘から始める。

太古を黄金時代と考える人々でも、同時に太古は悲惨で貧しく野蛮であつたとも考えていることが多い。退歩史観と進歩史観とは、矛盾するはずのものでありながら、このように実は同時に並存し得るのである。前四世紀のギリシアでも、現代を過去よりも優越しているという意識がある一方で、過去を理想化して現代の退廃を嘆く声があつた。例えば、プラトンにしても、進歩史観と退歩史観と、いずれもの先駆者と見なされて来た。プラトンの場合でも、その時の生における希望を著作に反映して

いるわけである。このような悲観と楽観はどの社会にも見られることであろう。しかし、啓蒙期以来の西欧に見られる未来へ向けての絶えざる進歩向上の思想は、ギリシアなどには認められない(八〇九頁)。ギリシア人にとって「自然」は靜的(στάσις)なものであり、それだけに自然についての知識は時代とともに進んでゆく可能性があった。しかし、その知識によって自然を征服するという思想は全く存在しなかった。この思想はギリシアからではなく、ヘブライから起源する。『創世記』(一章二八)で、神は創造の第六日目に、自分の姿に似せて男女を造ったのち、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」と命ずる。近代西欧の科学技術の根源には、この命令がある。ここに古代ギリシアと近代西欧との根本的な相違があるという。

このような根本的または常識的な指摘をおこなった上で、著者は進歩思想の証拠とされる個所を再検討してゆく。その最古の重要なものは、クセノファネスの断片「神々が最初から人間に万事を明かしたのでは

なく、人間が探究して改善の道を発見して来たのだ」という言葉である。この言葉は、一見したところでは、進歩思想を端的に表現しているようであるが、しかし、この同一の思想家が別のところでは不可知論を表明していることなどから、人間の能力を大きく見ていたとの解釈を下すことはできないとする。その他、アイスキュロスにおけるプロメテウス神話の扱い方、ソフォクレス『アンティゴネ』における「人間讃歌」、アナクサゴラスやデモクリトスを検討し、

いずれについても否定的な結論を出す。さらにツキュディデスの冒頭の「アルカイオロギア」の部分については、比較的详细に検討している。この部分に一種の進歩史観を認めるのが恐らく常識であろう。「H. Finleyやde Romillyなどは、その立場の代表である。しかし最近では Hans-Peter Stahl がこれに反対しており、本書の著者もそれに賛成する。「確かにツキュディデスは人類とその環境との間の関係の面で改善の例をいくつか指摘しているが、しかしそれは単に彼の主題(権力発展の説明)のための背景として利用しているに過ぎない」という。そして少し脱線して、十九世紀中

頃以来、「共産主義」「社会主義」「資本主義」などという近代的な現象を古代にも見出そうとする傾向があったが、その危険性は論ずるまでもないと警告する。次いでツキュディデスの本論へ進み、進歩思想を示すとされる三つの個所を取上げ、いずれについても否定する。確かに、この三個所に明確な進歩思想を認めることは困難であろう。

しかし「アルカイオロギア」の部分の場合には、ここに一種の進歩思想があることは否定できない。単に中心主題のための背景として利用されているに過ぎないのだとしても、ここで重要なのは、背景か中心主題かということではなくて、むしろツキュディデスが近代の進歩思想家のように、今後とも発展してゆくものと考えていたか否かという点であろう。そして答えが「否」だとすれば、それが何故に起ったのかということの説明しなければならぬ。著者はこの問題を明確には設定していないが、この点についての著者の説明を多少は読み取ることができる。ヒボクラテス文書を検討して、ここでも進歩思想を否定した上で、著者は最後にもう一度ツキュディデスに戻

り、ツキユディデスの史観を循環史観だと規定しているからである。比較的最近では、J. H. Finley を除いて、循環史観だとの説を否定するのが普通であるが、著者はこの崩れかけた説を再興しようとするのである。しかしツキユディデスが完全な意味で歴史の繰返しを考えていたとまで説くのではない。歴史に繰返し面があることをツキユディデスは強調する傾向があるということをも根拠に、それゆゑ循環史観だというのである。従つて、ツキユディデス解釈の上で大きな相違があるわけではなく、cyclical view of history という用語を、こゝで適用するのが適切か否かという言葉の問題に過ぎない。著者が何故ここで突然にこの問題を取上げたのか、その点の説明はないが、要するに、ツキユディデスの史観は循環的であり、将来とも人間性は同一不変だと信じていたのだから、進歩史観ではあり得ない、という論旨が言外にあるのであろう。本書は小冊子でありながら、論旨の展開は混乱している。

なお末尾より少し前の個所で、進歩の思想は二つに区別されるとして、「物質的・技術的な面での進歩」はギリシア人の発見

したことであるが、近代西欧人はそれを越えて、さらに広い面での無制限の進歩を考えたという(四六頁)。しかし余りにも簡単な指摘であつて、その意味は決して充分には理解できない。最後に近代思想と古代思想との比較の方法について一言しておこう。前述のように、著者は、近代的概念を古代に投影させることの危険を警告しているが、両者を比較するためには、さらに進んで近代や現代をも相対化しておく必要がある。これは西洋の学者にとつては自らの立場を相対化することであるから、もちろん容易なことではない。例えば、「アルカイオロギア」の部分には、海上支配の重視、政治権力の作用の重視その他、地理的条件など、特殊な要素が支配しており、西欧近代の進歩思想と様相が異なる。しかし近代西欧の進歩思想にしても、地理上の発見、植民地支配、科学技術の発達、鉄や石炭の分布状況、近代国家、キリスト教の分化、その他の特殊な条件と関係しているであらう。こちらをも当然自明のものとなせず、特殊なものとして相対化して見る必要がある。また近代西欧の進歩思想が現代において、どのようになつているのか。吾々にとつて未知なの

は、古代ではなく、むしろ近代や現代のことかも知れぬ。冒頭に掲げた Bury の著作は十九世紀中頃で終つており、それ以後を続ける人がいない。

(五九頁 一九一七年 Amsterdam, North-Holland Publishing Company)
(藤縄謙三 京都大学助教授)

J. Riley-Smith, *What Were the Crusades?*

「十字軍」と呼ばれる運動は、欧米における最も研究文献の多い分野の一つであるのみならず、その内実はともかく言葉自身の非常なポピュラリティーの故に、比喩的な用法を含めて様々なレビューで様々な立場からそれへの言及が行なわれて来た。それにもかかわらず——或いはむしろそうした情況の故に——何を以て「十字軍」と呼ぶかについての共通の理解が必ずしも確立しないまま、それぞれの論者がそれぞれの解釈に基づいて十字軍を論じて来たということができる。聖ヨハネ騎士団と聖地國家に関する研究で知られる J. Riley-Smith は、こうした現状を踏まえて、できるだけ簡明に十字軍の定義を提出しようとする。